第2部

日本語教育現場で目の当たりにしたクーデターの影響

国際交流基金ヤンゴン日本文化センター
生活日本語コーディネーター　横山清夏
sayaka.yokoyama.830@gmail.com

発表者のミャンマーでの経歴

2017年　国際交流基金日本語パートナーズ
としてヤンゴン外国語大学に勤務

2018年　民間日本語学校に勤務
（対象者：技能実習生・エンジニア等）

2019～　民間日本語学校に勤務
2022年　（対象者：特定技能）

現在は国際交流基金ヤンゴン日本文化センター
生活日本語コーディネーターとして国内委託

クーデター時に就業していた日本語学校の概要

特定技能人材の無償教育（地方の貧しい若者がターゲット）

日本に本社があり、ミャンマーのほか
東南アジア４ヶ国に学校あり

ヤンゴン／マンダレー（第二都市）に校舎あり

２019年設立　特定技能（介護）のみで開始
2021年から特定技能（外食・農業）も開始

生徒数 約1,500人　教師・スタッフ数 約80名

日本語学校での出国までの流れ(クーデター前)

★基本カリキュラム　週5日　1日8コマ

日本語教育（N4）4.5ヶ月　技能教育 1.5ヶ月

（2020年4月以降はコロナのためほぼオンラインクラス）

★試験受験（日本語・特定技能）

★面接（日本全国の介護施設とオンライン）

★来日手続きに約4ヶ月（待機中に来日教育）

⇒計画では約10ヶ月ほどで来日・就業できる

×試験が開始されない・コロナウイルスの影響で来日できず

クーデター後の日本語学校の状況①

2021年 2月1日　クーデター発生
インターネット（モバイル）が遮断されていたため、電話で安否確認などのみで休講

2月3日　本社から授業再開指示　⇒再開できず

2月8・9日　教師・生徒がデモに参加するため、授業が行えず

2月中　クーデターに反対する教師・生徒が多く授業を行えず

3月/4月　インターネット（モバイル・簡易Wifi）が遮断され
使用ができる教師・生徒のみオンラインにて授業を縮小して行う

5月　インターネットが安定しないが外食1期生の授業を開始

クーデター後の日本語学校の状況②

5月　現金がATMで出金ができなくなり銀行に行くために欠勤する教師が多くなる

6月　ほぼ平常に戻るが退学者が続出する（経済的な理由）

7月/8月　コロナウイルス感染が蔓延し欠勤・欠席者が多数

9月　内定者の状況を懸念し、内定先の介護施設とオンラインで交流する機会が増えるが、インターネットの不良や停電等で内定キャンセルが続出する

2022年3月　日本の外国人入国制限が緩和され内定者の入国が始まる

3月下旬　教師の退職が続出する

クーデター後に日本語教育の現場に与えた影響
【民間日本語学校】

●インターネットの遮断によりカリキュラムの進度が大幅に遅延

●経済が悪化し退学する生徒が増加
（働くため・通信費が支払えない）

●デモに参加して逮捕されたり、PDF（国民防衛隊）に入隊し
命を落とした生徒もいた

●教師が諸事情で欠勤すると減給となる
給与は増額しないが生活費が上がり教師の退職が続く

●教師がミャンマーに将来を見出せず日本に就業・留学

民間日本語学校の日本語教師の話

クーデター直後は、軍事政権に反対することが、仕事より大事だった。生徒もデモやPDFに参加し、勉強どころではなかった。

状況が変わらない中、本社からも通常業務を行うように言われたが、経済が悪化し生活が厳しく、多くの生徒が退学するのを見て、自分たちのモチベーションも下がった。

クーデターから1年経った頃から、教師もミャンマーの将来に希望が持てず、日本に就職や留学をする仲間を見て、現在は同じように日本で就職したいと考えている。

民間日本語学校の生徒（卒業生）の話

クーデター前からコロナウイルスなどで勉強が遅れたしまったが、クーデターの後は授業にも集中できず、並行して仕事もしなくてはならなかったので、日本語能力も落ちてしまった。

クーデター前から内定が決まっていたが、なかなか日本に入国ができないため内定取り消しとなってしまった。次の面接日程もなかなか決まらず学校に対しても不信感が募り、日本語能力も落ちて自信がなくなり、退学を考えたことがあった。

今は日本で介護の仕事をしており、家族にも仕送りができて精神的にも安定している。家族の顔を見たいので帰国はしたいと思うが、ミャンマーでは仕事が無いので、できるだけ日本で働きたい。

クーデター後に日本語教育の現場に与えた影響【国立外国語大学】

●国立大学のため政府に反抗し多くの学生が授業に出席しない

●学生が大学に復学するタイミングがバラバラなため、
クラス内でも学生の能力にばらつきが生じる

●学生の教師に対する態度の変化

●教師は政府に反対するためCDM（市民的不服従運動）を
実行し教師が激減（ヤンゴン19名中4名退職・マンダレー全員退職）

●教師の立場的・心理的な分断

●政府（教育省）の方針が都度変更し、現場が振り回される

国立外国語大学の准教授の話

軍事政権の下で大学に復職するか非常に悩んだ。
しかし、自分の生活もあるし、この状況がいつ終わるか分からないため、学生の将来のことを考えると復職を決意した。
学生も自分の将来のことを考え、今後は大学に復学・入学する学生も増えると思う。

大学復帰直後は軍関係の教師との関係が気になったが、今はそれも含めて以前のような関係に改善した。CDMを行った教師とはほとんど交流はない。

国際交流基金からの専門家等の派遣がストップしてしまい、困っている。大学には不可欠なため、ぜひ再開してほしい。
（政治と教育は別のものとして考えてほしい）

クーデター後のミャンマー人の日本語を学習する目的と学習者層の変化

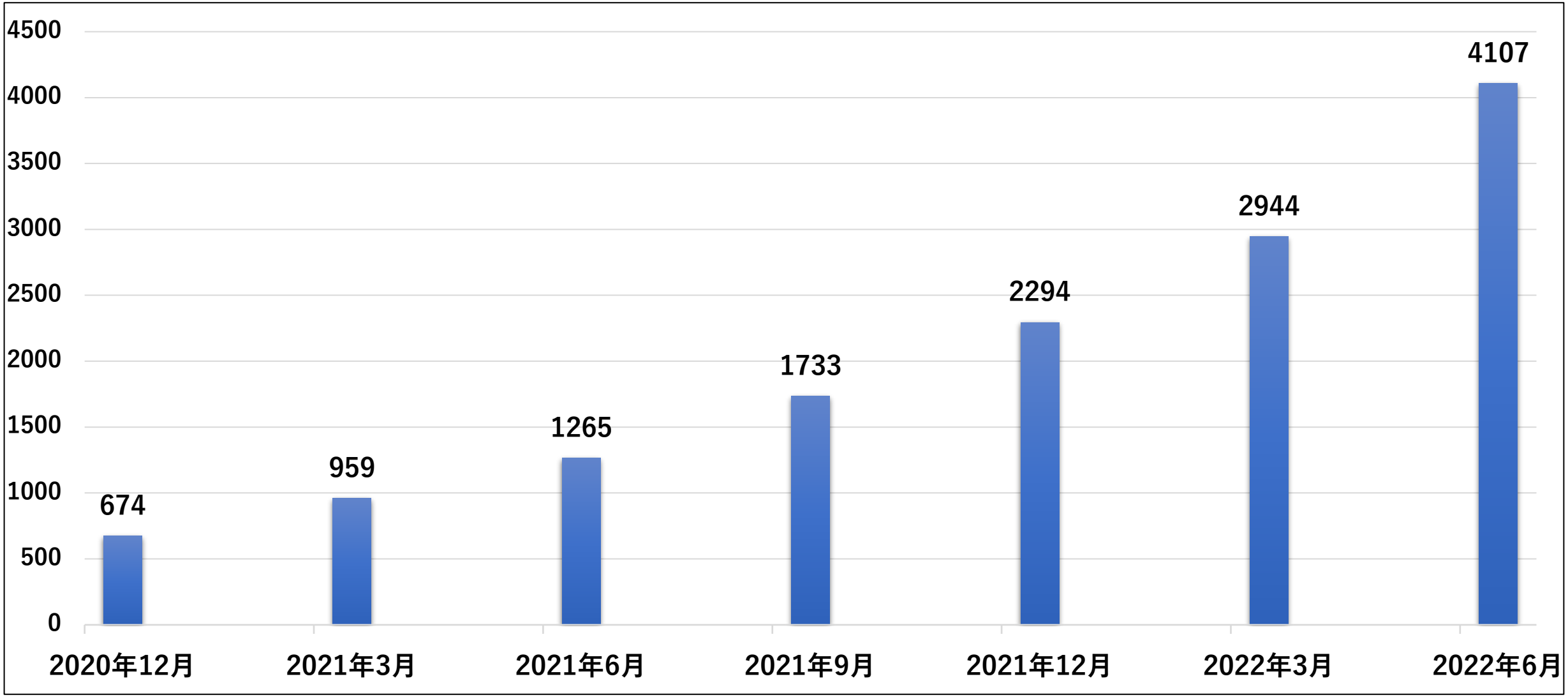
【クーデター前】

目的：就職（日本・ミャンマー国内の日系企業）・留学・趣味
学習者の層：主に中級/低所得層・中等教育卒業者
日本での就業期間：短期的な就業（家族を支えられる程度の貯金があればいい）

【クーデター後】

目的：就職（日本）
⇒ミャンマーの将来に希望が持てず、海外への就業を希望する若者の増加
学習者の層：高所得層・高等教育就学中・卒業者も増えてきた
⇒大学に通わない・国内での就職が見込めない
日本での就業期間：長期的な就業（自分の将来のため）

特定技能1号 日本在留人数（ミャンマー人）



出典：特定技能在留外国人数の公表 | 出入国在留管理庁 (moj.go.jp)
https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/nyuukokukanri07_00215.html

クーデター下で日本語教育の現場にいて感じたこと

教育の「無力さ」と「希望」

「無力さ」
今までの日常生活が一転してしまった
クーデター直後は日本語を学ぶことより生活を守ること

「希望」
日本語を学ぶことは、今のミャンマー人にとっては
人生を懸けたチャレンジ

日本語に望みを持っている教師・学習者のために
何ができるのか？

日本語教育を通じて、ミャンマーの状況に関心をお持ちいただけましたら幸いです

ご清聴ありがとうございました